

ボランティアの力

MDアンダーソンがんセンターの場合

- 1500人前後の登録ボランティア(元患者、家族、友人ら)
- 元患者ら1000人近くがチームを組み新患者から電話相談を受ける「サポートライン」
- 各診療科配属、クラフトチーム・・・約70のボランティア活動プログラム
- 統括するのは同病院の「ボランティアサービス部」

今月初めの約一週間、テキサス州ヒューストンにある「MDアンダーソンがんセンター」を訪問して、乳がん患者会「ソレイユ」(中村道子会長)が企画した訪米勉強会に、患者の一人として参加したのだ。

同病院は、州立テキサス大学が運営するがん専門の総合医療センターで、年間約四十五万人の外來患者が国内外から訪れる。米誌「USニュース・アンド・ワールド・レポート」がシカゴ大学の協力で毎年行っている「ベスト・ホスピタル」調査で、今年を含め何度もがん部門全米第一位選ばれており、治療や研究、教育は世界トップクラスだ。

今回の訪問では、同病院が得意とするチーム医療や最新治療の事情を聞くなど収穫が多かったが、最も印象に残ったのは、ボランティアによる組織的な患者支援サービスの徹底ぶりだ。

患者の視点

II 訪米報告(上)

患者支援のボランティアも医療チームの一員

現在登録しているボランティアは約千四百人で、ほとんどが元患者や家族、友人だという。彼らの活躍について、同病院ボランティアサービス部ディレクターアサヒス部ディレクターのロリー・アルブリアさんは、「がんのつらさ

者と話したい」などの要望に応じながら、患者の精神的サポートに取組んでいる。各診療科にも配属されており、ホスピスで働く元乳がん患者のナン・フルデンシャルさん(70)は、「患者や家族と友人になっ

る。また、「ハンドクラフトグループ」は、手工芸品を作って小児がん入院中の子供たちにプレゼント、一般にも販売している。患者には接しないが、その収益金が寄付と共にボランティア活動の重要な運営資金

患者の身体的、精神的な生活全般を支えたいという姿勢に、患者こそ「おやま」しくも思った。

ボランティア以外でも、病院の患者支援ニュースは充実している。院内には三つの図書室があり、専門スタッフが患者の知りたい問題を最新の学術論文を含め一緒に調べてくれる。美容室では、抗がん剤治療で頭髪の抜けた患者にかつらや帽子をプレゼント。おしゃべりの工夫教室も開いている。さらに驚いたのは、サプリメント(健康補助食品)情報の提供やヨガ、太極拳教室、ハーブ療法なども行われていることだ。このように「代替療法」は米国内でも関心が高く、政府も研究を進めているのだ。

一般国民を対象にした公的医療保険がないと、問題も指摘されている米国の医療だが、「新しい患者支援の取り組みには学ぶべき点も多いと感じた。」

をよく理解している経験者こそが、患者にとって一番の支えになるとして、考えで、ボランティアを医療チームの一員と位置づけていると説明する。

例えば、患者から電話相談を毎日受け付ける「サポートライン」というサービスでは、約八百五十人がチームを組み、「私と同じ大腸がん経験

て話を聞いたり、患者と医者とのコミュニケーションを取ること、心安らかに過ごせるよう支援するものが私の役割」と誇らしげに話す。

「病名や治療に関する知識を持つことは、どんな状況でも希望を持って生きる力ギになる」を合言葉に、ボランティアによる様々な患者教育プログラムもあり、病名治療だけでなく、病気の自慢だ。

間よりも長いのが自慢だ。日本の病院では、ボランティアは外來案内程度でしか受け入れられていないのが現状だ。それを使うと、病院とボランティアが一体となり、病名治療だけでなく、病気の自慢だ。

こうした活動は七十以上もあり、年間の総労働時間は二十七万時間と、同病院医療スタッフの合計労働時間よりも長いのが自慢だ。

日本の病院では、ボランティアは外來案内程度でしか受け入れられていないのが現状だ。それを使うと、病院とボランティアが一体となり、病名治療だけでなく、病気の自慢だ。

(本田 麻由美)